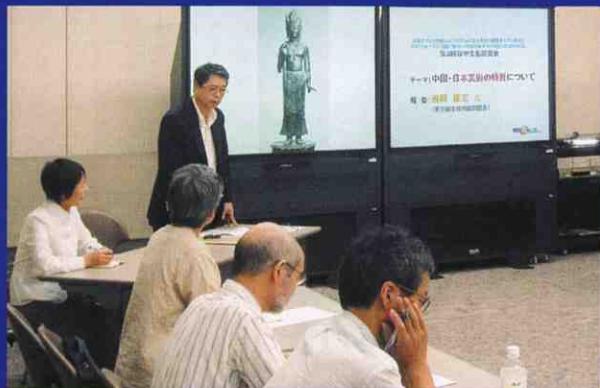
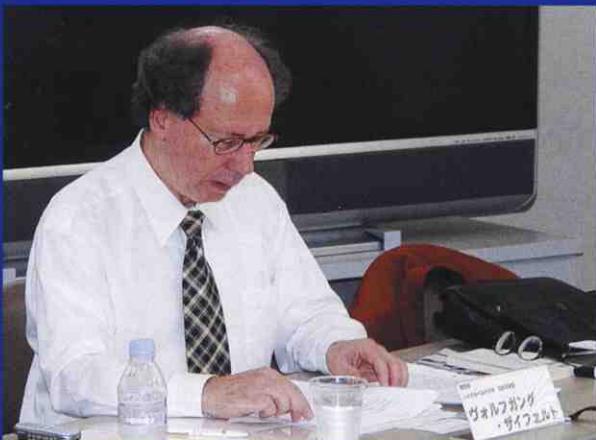


The Newsletter

HOSEI I.J.S.

No.5 Dec.2006.



CONTENTS

日中文化研究会報告	2
公開研究会報告	4
公開ワークショップ報告	5
成果報告会	6
活動の足取り／新刊案内	8

第1回日中文化研究会

「日中齟齬の文化学的研究—時間と空間の認知傾向を中心にして—」

李 国棟

(広島大学外国語教育研究センター教授)

● 日 時：2006年7月3日(月) 18:30-20:30 ● 場 所：第一校舎4階 国際日本学研究所セミナー室

21世紀COEプログラム「日本発信の国際日本学の構築」中のタスクフォース②「西欧(独・仏)・中国の日本文化研究の総合的研究」の研究活動の一環として、日中文化研究会を開催した。第1回研究会は7月3日(月)、広島大学外国語教育研究センター教授李国棟氏による「日中齟齬の文化学的研究—時間と空間の認知傾向を中心にして」と題する研究報告であった。

1958年、中国北京生まれの李氏は、北京大学修士学位取得後、アサヒフェローシップ(朝日新聞国際奨励金)を受賞して来日。広島大学博士学位を取得してから同大で教鞭を取っておられる。著書に『夏目漱石文学主脈研究』(北京大学出版社、1990年)、『魯迅と漱石——悲劇性と文化伝統』(明治書院、1993年)、『日中文化の源流——文学と神話からの分析』(白帝社、1996年)、『中国传统小説と近代小説——様式に見る作品の特徴』(白帝社、1999年)、『魯迅と漱石の比較文学的研究——小説の様式と思想を軸にして』(明治書院、2001年)、『日本見聞録——こんなにちがう日本と中国』(白帝社、2002年2月)のほかに、論文57篇など著述が多数ある。

李氏の研究は、「俳聖」松尾芭蕉の俳句と中国の「詩聖」杜甫の漢詩をはじめ、日中の代表的な詩歌の比較にあった。俳句は日本人の特徴としての時間的な変化や余韻をよく表現していること(時間性重視)、漢詩は中国人の特徴としての空間性(空間的な広がり)を重視していること、同時に対称性を不可分にしていることを明らかにした。この一方で、漢詩の影響を受けた俳人として与謝蕪村を挙げて、その作品には対称性と空間的な広がりがあることも指摘した。

「五月雨」を題材にした俳句によって比較している。

①五月雨を／あつめて早し／最上川

②さみだれや／大河を前に／家二軒

芭蕉の俳句①が最上川の流れの速さを表現しているのに對して、蕪村の俳句②は大河を背景に二軒の家を空間的に焦点化して、漢詩的な世界に通じるものを見せてくれている。蕪村俳句が示している対称性への心がけは日中における時空認知上の共通項でもあろう。しかし、その対称性への重視の程度に関して、日中の間に相違点が感じられる。それをめぐって李氏は豊富なデータを駆使して実証しながら、対称性への関心と重視度による思考及び認識の違いをも力論した。

結びに李氏は時間の縦軸を現代に据えつけて日中関係の不調和現状の突破口を文化学の角度からアプローチした。対称性を求める軸にする対話の継続が、双方を軸に向かわせていく。時間の通過が必要とはいえ、だんだんと齟齬解消につながるのではないか。認識の違いがあつても日中が共有している対称性への関心と重視を方法論に、現実問題に取り組む可能性を提案した。高い次元の精神性を必須とする課題ではあると思われるが、李氏なりの文化学による研究への熱意がひしひしと伝わってくる。

李氏は『礼記』にある「礼は往来を尚ぶ。往きて来らざるは礼に非らざるなり。來りて往かざるも亦た礼に非らざるなり」を対称性重視思考を反映する例にした。

李氏の視点は日中文化研究会の研究活動に刺激的な参考になるものと思う。

(国際日本学研究所教授 王 敏)

第2回日中文化研究会

「典型事例から探る日中異文化コミュニケーション」

三瀬 正道

(麗澤大学教授)

● 日 時：2006年7月22日(土) 14:00-16:00 ● 場 所：ボアソナード・タワー19階 D会議室

この日、麗澤大学教授三瀬正道氏をお招きして、第2回日中文化研究会を開催した。三瀬氏は、西洋と日本を対象とする異文化コミュニケーション研究が主流である日本において、早くから中国と日本を対象に研究をされていた方である。今研究会では「典型事例から探る日中異文化コミュニケーション」というテーマで、貴重な体験をもとにしたお話をうかがうことができた。

報告趣旨は以下の通りである。

各国の国益をいかにして調整するかを研究する国際政治学、それぞれの経済的優位性をかみ合わせ、ワインワインの関係を構築しようとする国際経済学に対し、異文化理解は他国の文化に対する尊敬を育む役割を担う。日米関係が牛肉問題などでゆれても、アメリカ文化の本質に対する理解

が進んでいるため、決定的な嫌米感情は生まれない。他方、日中間で相手の文化に対する理解が低い現状は、多少の軋轢も過激な嫌日・嫌中感情を生む。

中国を知るには三つの大きな引き出しがある。第1は歴史的要因に由来するもので、長い封建王朝、時には異民族支配に遭遇した庶民は、政府やその道具たる法律から身を守る事が生存上の最大課題だった。それゆえ賄賂が身を守る手段として定着し、また秘密結社の動向が歴史を大きく左右した。“好客”という習慣も、身を守るために人的ネットが最大の寄る辺だったからである。

第2に、その商業民族としての論理性が挙げられる。鄧小平の白猫黒猫論を引き合いに出すまでもなく、結果重視の実利主義で、理屈は後付け、面子が立てばよい。その一方で、イギリス人のユーモアに匹敵すべき論理好きの側面がある。

春秋の名家は論理学で一家を成しているが、論理を楽しみ機転の利いた言辞を尊ぶセンスの無い者イコール文化(教養)の無い人間であり、まともに相手にされなくなる。こういった例は『史記』などの歴史書や『三国志』といった小説類に枚挙に暇がない。その商業民族としての特性は“討価還価”(値段交渉)に遺憾なく発揮される。人の能力を測る最大の物差しは、いかにしてよいものを安く手に入れられるかであり、人におごってもらって「安いね」と感嘆してみせるのはそのためである。この能力は政治交渉でも発揮される。

第3は、礼儀の違いである。日本人はいかにして相手に迷惑や負担をかけないかに重点を置く。中国人はいかに相手に自分の誠意を伝えるかに重点を置く。したがって、人に物を頼んでから後で御礼をする日本人と、先にご馳走やプレゼントをして、それから頼む中国人の間では、誤解が生じやすい。これに関する類例は数え切れないほどで、しかも多く

の誤解の元になっている。

三浦氏は終始、ビジネスを含め、日中交流現場における実例を挙げてご報告をされ、参加者は一様に深く感銘を受けた様子であった。

我々、テーマタスクフォース②「西欧(独・仏)・中国の日本文化研究の総合的研究」もまた、社会文化の角度から日中相互認識の「ずれ」を究明することに視点を置き、日中間における「同文同種」感覚への過大信頼を払拭し、日中の間も「異文化」であるという認識を持つことの必要性を訴えてきた。

こうした研究会での発表データを互いに積み重ねることにより、日中異文化コミュニケーションがより一層深まつていくことを、心から祈るばかりである。

(国際日本学研究所教授 王 敏)

第3回日中文化研究会 「中国・日本美術の特質について」

西岡 康宏

(東京国立博物館副館長)

● 日 時：2006年8月23日(水) 18:30-20:30 ● 場 所：ボアソナード・タワー25階 B会議室

東京国立博物館の副館長で、東洋美術が専門の西岡康宏氏を招聘して、8月23日に「中国・日本美術の特質について」と題した公開研究会が行われた。西岡氏は、講演の冒頭に、特定の国の美術を研究する場合には、①特定の分野に入る前に、当該国の美術全般についての幅広い知識を修得すること、②最高の美術作品に触れることが2点が重要であると述べられた。氏は、中国と日本の美術作品を比較できるよう、以下の30の作品の画像を用意され、両国の美術の特質を論じられた。

彫刻：(中)如来立像、盧遮那佛坐像、楊貴妃觀音(日)夢違觀音、藥師如來坐像、大日如來坐像 **絵画**：(中)孔雀明王像、早春圖、四季花鳥圖、細雨虹松圖軸(日)孔雀明王像、源氏物語絵巻、松鷹図、松林図屏風 **書**：(中)尺牘、草書四帖(日)法華教(竹生島経)、寸松庵色紙 **工芸**：(中)銀鍍金合子、堆黒花鳥文長盆、堆朱花鳥文盆(日)銀小壺、片輪車蒔絵螺鈿手箱、梅蒔絵手箱 **陶磁**：(中)白磁刻花瓶、黃綠彩鳳凰文角鉢、珐瑯彩粉紅地花卉文碗(日)秋草文壺、志野橋文茶碗銘橋姫、色絵牡丹文水指

両国の美術の特質

西岡氏は、「両国の美術を色で例えると、中国は黒か白かで、日本は、中間の灰色である」と述べられた。日本美術には、両極端を融合・組み合わせて美的なものを生む特徴があり、茶室のアレンジの仕方(南宋の着色画と青磁や白磁の組み合わせ等)によく現れていると言わたった。また、両国の美術品を比較すると、「中国の作品は、日本の作品には余り見られない力強さや緊張感がある。この力強さ等は、高度な技術に由来するものであるが、その背景には日本に比べて厳しい中国の風土や言語、習慣、歴史の違いがある」と述べられた。

氏は、「日本美術の技術、道具、材料のいずれもが中国等から入ってきたものである。また、飛鳥から奈良時代の作品には、渡来人が制作したものが多い。日本固有のものは、土器や土偶など僅かである。時代が経過し、中国等から入ってきたものを、日本の風土や美意識に合うように和様化するなかで、今日“日本の”と呼ばれるものが生まれてきた」と指摘

された。また、「和様化は、常に意識的に行われたものではなく、日本側の力量不足を含め様々な要因により、そならざるを得なかつた側面がある」と述べられた。作品の細部まで拡大して見せていただき、技術面の巧みさや美意識の相違点(中国の鋭利さ、日本のゆるやかさ)がよく理解できた。氏の指摘された両国の美術の特質の相違点が生じた理由を更に解明するためには、アジアの中心的な位置にあった中国美術を周縁・日本がどのように受容したかについての研究が一層進展することが期待されるところである。

美術における日本的なもの

日本文化は、古代より中国の圧倒的な影響下にあったが、江戸時代の鎖国や明治以降の西洋化の導入により、中国離れが急速に進み、戦後もその流れが続いている。長い間唐物として尊重された中国文化は、日本人の憧れや教養の対象から、今日では研究者の研究対象になっている感さえある。今日改めて考えてみると、生活習慣や芸術の世界で“日本の”と呼ばれているものには、中国に由来したものや日本風にアレンジされたものが実に多い。日本のと言う言葉を安易に使用することに躊躇することも多い。日本の特質という言葉で片づけることで思考停止状態に陥ることのないように留意する必要がある。日本美術に関しても、アジアの中の日本美術という視点で見直してみることの重要性が増しているように思う。西岡氏は、「中国では消滅又は出土品としてしか見ることができないものが、日本に保存されている例が多数ある」と述べられた。まさに「日本はアジア文明の博物館である」(岡倉天心)と表現される実態があるのである。日本美術をアジアの美術と比較し、日本的なものの由来を探ることは極めて今日的な意義がある。このためにも、博物館で日本美術の作品を展示する際には、アジアの美術品と比較する視点を大いに取入れて展示してほしいと思う。

西岡氏の、博物館での長年の経験に基づく研究報告により、中国と日本の美術の特質、背景にある文化について考える絶好の機会となつた。

(法政大学特任教授 杉長 敏治)

「琉球処分と最後の琉球王」

ローザ・カーロリ

(ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学東アジア学科準教授)

- 日 時：2006年6月21日(水) 18:30-20:30
- 場 所：80年館 7階大会議室(角)

カーロリ氏による今回の報告は、琉球処分により東京へ移されたときに最後の琉球王が演じた役割を特に明瞭にし、琉球処分をより相対的に把握しようとする試みであった。以下、その報告の内容を簡単に記述する。

明治政府は全国が統一的に支配される中央集権体制を確立するため、版籍奉還と廃藩置県を発布した。このような大変革に琉球王国も巻き込まれ、1872年(明治5年)琉球藩が、1879年(明治12年)には沖縄県が設置された。琉球処分というプロセスは琉球藩が設置された時から沖縄県が設置されるまでの一連の措置として位置づけられる。

以上のような変化は琉球最後の王、尚泰の役割と本人の生涯にも影響をもたらした。琉球王尚泰は1843年に首里城下に生まれ、1848年5歳で琉球國中山王を継承し、1866年に中国より冊封を受けた。1609年薩摩が琉球王国に侵略し、琉球王国は島津藩の支配を受けたが、500年ほど持続されていた中国との親交関係も依然として継続し、日本と中国の両方に属した政治的に曖昧な地位を示していた。

琉球王国内政への日本の干渉は1872年琉球藩を設置し、尚泰王を「琉球藩王」に命じたことにより始まるが、その後3年の間、明治政府は琉球問題を外交問題の一環として扱った。例えば1871年琉球人が台湾南部で難破し、原住民に殺される事件が起つたとき、日本政府は中国に「わが藩存たる琉球人民の殺害せられしを報復すべきは、日本帝国政府の義務である」と報告し、1874年の春、台湾出兵を行つた。そして、その翌年(1875年)明治政府は琉球王国にこれまでの中国との関係を絶ち、明治の年号を用いることを命じた。

1879年3月27日には、琉球処分官松田道之が琉球藩に渡した令達書によって、沖縄県の設置と首里城明け渡し、尚泰の東京への出発命令が伝えられ、29日の夜、旧国王尚泰は数百年間収集されてきた大量の品や記録などとともに中城御殿に移された。

尚泰に関する唯一の資料である、東恩納寛惇が記述した『尚泰候実録』によると、同年4月13日、宮内勅使として派遣された富小路敬直と松田は病床にあつた尚泰に「迎えの汽船明治丸で直ちに上京するように」という書簡を渡した。しかし、尚泰の上京に関する旧王国の官吏や士族からの不平が表面化し、性急に尚泰を上京させれば事態が難しくなると判断した松田道之の助言により、15歳の尚典王子が5月2日に上京し、明治政府に尚泰上京80日間延期の請願書を提出したが却下された。

結局、尚泰は5月27日に13歳の次男尚寅とともに那覇を出発し、6月9日に上京、17日には長男尚典、次男尚寅とともに明治天皇に拝謁した。その日、尚泰は從三位に叙せられ麝香間祇候となり、長男尚典も從五位に叙された。また、長男、次男にも東京住居が命じられ、麹町区富士見町2丁目8番地

に邸宅を賜つた。

以上の結末をもって琉球処分は完結したのであるが、カーロリ氏はここで、明らかにすべき幾つかの点を示した。

まず、尚泰自身上京を永続的なこととして見なしたかどうかである。実際、彼は上京の際に、旧王朝の官吏は従えたが、王朝の宝、尚氏の財産や親族、首里政府当局の資料などは沖縄に残しておいた。

もう一つ不明の点は、尚泰が何年間も拒否したにもかかわらず、次男をもつて上京した理由である。この点について注意すべきは、上京の何年か前から助力を仰ぐために首里政府の公使が中国に行つていることである。おそらく中国からの助力の可能性が希薄になり、それが上京の原因の一つになったのではないか。また、この点を考えると、答えるべき質問がもう一つ出てくる。即ち、明治政府は、いつ東京を尚泰の永続的な居住の地に定めたのかということである。実際、令達書は永続的な居住という点には言及しておらず、また、松田の中城御殿在住2ヶ月の間にも明治政府は尚泰の在住についてまだ合意に達していなかった。

歴史的な視点から見直せば、尚泰像はこれまで報告されてきたものとは異なる意味を帯びてくる、とカーロリ氏は言う。例えば、尚泰の上京のことを聞いた旧王国官吏や士族が上京を阻止しようとした時、尚泰自身は彼らを静めようとした。また、沖縄置県前後に琉球の日本統合に反感を抱いていた彼らに対し、明治政府への恭順を何度も説いた。琉球処分の時期、特に上京の際に尚泰の定めた役割は、一般的に歴史研究に認められているより重要なのである。即ち、歴史の運命に全てを任せた最後の王国のイメージは部分的にしか受け入れられず、彼の従順な態度の理由は平和を愛する小さい国の王であつたためだけではないと考えられる。

尚泰は琉球処分期の重要人物であることは確かではあるが、彼の果たした役割についての歴史研究には幾つかの欠落があり、80年も前に東恩納寛惇の実録で評決されたままの最後の琉球王の像を再考し、このような欠落を補わなければならず、今後の研究による一層の究明が必要である、とカーロリ氏は報告を締めくくられた。

(国際日本学研究所学術研究員 申 惠蘭)

「ドイツの研究者から見た丸山眞男の政治思想」

ヴォルフガング・ザイフェルト

(ハイデルベルグ大学東アジア研究センター日本学教授)

- 日 時：2006年9月30日(土) 13:30-15:30
- 場 所：ボアソナード・タワー19階 D会議室

ドイツのハイデルベルグ大学東アジア研究センター副所長で日本学教授のヴォルフガング・ザイフェルト氏にとって、丸山眞男との邂逅は、日本と日本の知識人についてのイメージを大きく覆すものであったという、個人的エピソードからこの報告は始められた。ちなみに、それまでは、日本は異国趣味の対象でしかなく、日本の知識人から学ぶべきものがあるとは到底考えられなかつた。しかし、丸山眞男の書いたものからは、日本の政治思想についての知識だけではなく、思索のあり方そのものまでも学び取ることができたという。ザイフェルト氏は、すでに丸山眞男の著書二冊(『日本の思想』、『忠誠と反逆』)のドイツ語訳を出されており、近々「超国家主義の論理と心理」などの論文集のドイツ語訳を出される予定である。

この報告は、第二次世界大戦直後の日本の丸山眞男とドイツの知識人の「近代」理解の比較を通じて、その違いをもたらした原因を探求しようというものであった。

まず、ザイフェルト氏は、第二次世界大戦直後に発表された論考「近代的思惟」(『文化会議』1号、1946年1月)、論文「超国家主義の論理と心理」(『世界』1946年5月号)を手がかりとして、丸山眞男の「近代」理解を解明する。そのさい、同時に、近代主義者として丸山を批判する論者の多くには見落とされている論点がいくつか紹介された。

前者の論考で、丸山は、近代思想を西欧思想と同一視することを批判し、例えば徳川時代の思想にもその萌芽があつた、しかも、蘭学だけではなく、これまで封建イデオロギーと見なされてきた儒教や国学にもそれがあつたと論じる。丸山にとって、「自主的人格」である個人が「主体」として政治にかかわっていく「近代」のあり方は、18、19世紀の欧米諸国においてさえ完全なかたちで実在したものではなく、欧米諸国はもとより、人類がみな文化の差異を超えて目指すべき理想だったのである。

後者の論文で、丸山は、対外的膨張と対内的抑圧の暴力的なナショナリズムについて、その思想構造ないし心理的基盤の解明を試みる。それは、教育勅語以来、国家が「倫理的実体として価値内容の独占的決定者」とされ、「近代」の歴史的前提条件である公的領域と私的領域との峻別が果たされないどころか、国家が人間の内面に無限に介入することに根ざしている。しかも、権威への依存性が、国民一人ひとりから、軍人、官僚、政治家、そして天皇にまで浸透している。こうした超国家主義の論理と心理に対抗して、丸山は、「近代」の理想を掲げ、「純粹な内面的倫理」、「自由なる主体的意識」を各人が確立することを訴えた。

次にザイフェルト氏は、第二次世界大戦直後、ドイツの知識人の対応を取り上げ、丸山とは対照的に、近代に対する積

極的な評価が認められないことを指摘する。そのさい、取り上げられたのは、ドイツの知識人5名の以下の論考である。

ドイツ精神の自己批判の性格を色濃く帯びた、トーマス・マンのアメリカでの講演「ドイツとドイツ人」(1946年)。教養市民文化の衰退を嘆く、マイネットケの「ドイツの悲劇」(1946年)。文明化を自然支配の進展と見なし、全体主義の相關物である大衆文化に近代の最大の危機を認める、ホルクハイマー、アドルノ『啓蒙の弁証法』(1944年)。そして、ヤスバースの戦争責任論である、講義「罪の問題」(1945年)。

ザイフェルト氏によれば、そこには、「近代」の原理によって確保された私的領域の肥大化がもたらした大衆社会状況を全体主義の元凶とみなす見方が優勢であつて、丸山のように「近代」の理想を掲げ、それを評価する姿勢は認められないということである。

最後に、この違いは何によるのであろうか。ザイフェルト氏は、知識人の一人ひとりの体験の違いにも説き及びながら、亡命、少数民族の問題、強制的同質化などの現象に着目しつつ、歴史的局面、社会的背景、そして、心理的基盤の違いを、仮説として提示する。例えば、「近代」という概念一つとっても多義的でそのとらえ方が様々であること、そして、同じ「戦後」が日本とドイツではおのずから違っていること、したがつて、安易に両者を同一視しないことの重要性を強調することで、本研究報告は締め括られた。

研究報告を受けた討議では、「近代」概念の多義性、ネガティブには私人を、ポジティブには公民を意味する「市民」概念の多義性、丸山眞男の戦後における思想の遍歴など、興味深いテーマについて予定の時間を超えて議論することができた。日独の研究者間での議論は、翻訳の問題、異文化理解の問題にまで展開し、国際日本学のあり方をとらえ返す有意義な機会でもあった。

(国際日本学研究所所長 星野 勉)



学術フロンティア成果報告会「日本学の総合的研究」

- 日 時：2006年12月25日(月) 13:00–18:00
- 場 所：ポアソナード・タワー25階 B会議室

本研究所では、平成14年度以来、「日本学の総合的研究」プロジェクト(文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業【学術フロンティア部門】」採択)を推進、展開してきた。本年度がこのプロジェクトの最終年度となるが、2006年12月25日、13時～18時、ポアソナード・タワー25階、B会議室において、成果報告会を開催した。各チームのリーダー(もしくは、サブリーダー)による五年間の研究成果報告をうけて、活発な議論を交わしたが、それを通じて、研究成果の共有化をはかるとともに、プロジェクト全体の研究成果の取り纏めを行った。

各チームの報告内容の概要

1. 相良匡俊社会学部教授：テーマプロジェクト①

「外国の日本学研究事情」

西欧諸国研究機関との学術交流事業、西欧における日本学研究事情の調査についての報告後、19世紀末以降のフランスにおける日本学研究史に関する報告があつた。なかでも、1920年パリ大学文学部日本文明講座開設時に主任教授に就いたミシェル・ルヴォンについての報告は興味深いものであった。島本昌一『法政大学図書館・ルヴォン文庫について』などの文献に基づく報告内容の概要是以下の通りである。

ルヴォンは1892年に法律学者として来日したが、数年間、本学の前身、和仏法律学校の教授のポストにあつた。フランス帰国後に、日本文化への関心から日本学研究者に転じ、北斎研究、華道研究、神道研究などの業績を残した。彼の業績はこれまでフランスの日本学研究史のなかで必ずしも高い評価を得てこなかった。しかし、フランスにおける日本学研究の先駆的な業績として再評価の余地がある。

なお、奇遇と言うべきか、彼の蔵書の一部がルヴォン文庫として法政大学図書館に所蔵されていることである。

2. 飯田泰三法学部教授：テーマプロジェクト②

「アジアの中の日本学」

この報告では、中国貴州ミヤオ族、およびトン族の調査研究に基づいて、日本文化の形成・展開を考える上で新しい論点が提示された。それは、日本文化を、黄河文明に発する中華文明とは異なる「もう一つの東アジア」、すなわち、長江文明に発する「イネの道」および「海のアジア」のなかに位置づけ直そうという論点である。丸山眞男の「古層」論を改編することによって、日本文化の古層は、人類史的古層、アジア的古層、天皇制的古層の三つに分類されるとするが、このうち、アジア的古層には長江文明に発する「イネの道」および「海のアジア」が関わっているという。ちなみに、この論点は、黄河文明(=中華文明)中心のアジア観、および、天皇制的古層を日本文化の搖るぎない基盤と見る従来の日本文化論に挑戦するものである。さらにまた、日本文化に色濃く影

をおとしているアニズム、シャーマニズムを東アジアの原宗教という観点から再考することによって、日本文化を広く東アジアのなかに位置づけ直すことができる」とされる。斬新な見解ではあるが、地域調査研究に基づく実証的な裏づけが俟たれるところである。

3. 天野紀代子文学部教授：テーマプロジェクト③

「古典文化と民衆文化」

「富士山はいつ日本の象徴になったのか。『万葉集』に既に〈日の本の鎮め〉とも〈国の宝〉とも詠われている富士山への意識は、時代によっても地域によっても異なって現在に至っているが、そこに流れる一貫した心性と何なのか」。このチームでは、このような問題関心のもとに、「富士山をめぐる日本人の心性」を、多くの専門領域から、また、外国人による富士山研究をも取り入れながら、共同で研究することによって、富士山研究についての新しい知見を得つつあることが報告された。なかでも、秦の始皇帝に発する遙か東海の「蓬萊山=富士山」という視点は、富士山学なるものが外からの眼差しによっても形成されてきた(異文化研究)を含むするテーマでもあったとの指摘は、日本文化研究にとってきわめて示唆に富むものである。

4. 漆原和子文学部教授：テーマプロジェクト④

「風土が作る文化」

このチームは、地域ごとの特色を育てた風土と文化の問題に、「屋敷囲いとしての石垣」の研究という側面からアプローチした。石垣の様式一つをとっても、それは、風土とのかかわりにおける地域住民の生活様式の表現であるかぎり、また文化でもある。そして、台湾、南西諸島、九州、対馬、濟州島、四国、沖ノ島、紀伊半島に至る広範な地域の現地調査によって、次の三つの知見の得られた旨の報告があった。

I. 石垣を屋敷囲いとして使用している地域を決定する基本要因は強風域である。(1)冬に強い季節風の吹く地域、(2)台風の経路上にあたり、強風域になる地域。

II. 日本と韓半島の屋敷囲いとしての石積みの様式には、少なくとも大きく2つの積み方がある。(1)琉球様式：基本的に野石を積むが、隅角を円く曲面をつける。分布範囲は、南西諸島—九州南部—対馬—濟州島。(2)本州様式：穴太積みとも呼ばれ、野石を積み、隅角は陵を持ち、場合によってはそりを持つ。分布範囲は、(1)の東側にあり、日本海側は沖ノ島まで、太平洋岸側は串本まで。

III. 台湾海峡では屋敷囲いとして石垣を作るのではなく、野石を土壁で塗りこめた壁で母屋を造る、または樵石造りの母屋を造ることで、冬の強風に対抗している。

さらに、石積みの様式の伝播の仕方、「ヒンブン」、「石敢当」の分布と文化的意味など、風土と文化をめぐる問題を考える上で、示唆的な成果報告であった。

5. 澤登寛聰文学部教授：テーマプロジェクト⑤

「日本の中の異文化」

アイヌ文化の成立と変容について、青森、白老、網走などの研究会を通じて、多くの特筆すべき研究成果が得られた旨の報告があった。

アイヌ文化成立前史については、1)文献史学に基づく分析による、従来あいまいであったエゾの成立年代の絞り込み、そこでの中央政府と地方官衙の政策過程の解明、2)東北と北海道の歴史考古学的資料に基づく分析による、従来の学界の議論で数百年もの空白(ミッシング・リンク)があつた擦文文化の終末(すなわちアイヌ文化の成立)にかかる年代観についての解明、3)アイヌ文化のもう一つの源流である、道東～千島地方にかけて展開されたオホーツク文化の解明。4)こうしたアイヌ文化成立前史の詳細な把握による、アイヌ文化の特質である「交易と交流」の形成過程の解明などである。

近世アイヌについても、「交易と交流」という特徴を柱にいくつかの視点からアイヌ文化の特質を解明することができた。1)北海道内でのアイヌ文化の地域差(例えば、石狩・胆振地方アイヌの特質、各地域のアイヌの自己認識の差異など)についての新たな解明、2)樺太アイヌと北海道アイヌの物質文化における違い(木製守護神に刻まれた刻印と人面との関係など)の解明、3)弘前藩領における「御目見」儀礼に基づく本州アイヌの身分的側面の解明、4)青森県域に存在した狹村の実態解明、青森県域に濃厚に残存する蝦夷錦の存在からアイヌを取り巻く大陸沿海地方までを視野に入れた交易分析、5)本州アイヌの痕跡の考古学的な跡づけなどである。

なお当テーマプロジェクトでは、こうした成果を挙げるための基礎作業として、研究文献の詳細なデータベース化を促進し、かつそれをネット上に公開して、世界各地から自由に検索することができるようとした旨の報告もあった。

6. 間宮厚司文学部教授：ワーキングプロジェクト

「成果の情報化と活用」

ワーキングプロジェクトでは、能楽研究所、沖縄文化研究所とも協力して、日本研究という観点から国際的に価値あるコンテンツを電子資料化(デジタル化)し、それを世界に向けて公開する「電子図書館システム」構築の作業を進めてきた旨の報告があった。その概要は以下の通りである。

「電子図書館システム」のハード面の整備は、本研究所のサーバーに「デジタル・ライブラリ(Digital Library)」という画像と解説をセットにした検索システムを組み込むことで完了した。コンテンツも拡充されつつあり、現時点で、本研究所所蔵画像データ46件、沖縄文化研究所所蔵画像データ56件、能楽研究所所蔵画像データ7097件である。能楽研究所提供のデータは、件数が多いだけではなく、キャプションとして詳細な解説を付加することによって利便性が飛躍的に高まった。さらに、二つの全文検索システム、「Namazu」と「FileMaker Server8 Advanced」の導入によって、「デジタル・ライブラリ」では困難であった様々なデータベースの作成、公開が可能になった。

現在、中世北方史関係研究文献目録データベース、アイヌ史関係研究文献目録データベース、北方史関係考古学研究文献データベースの作成作業を継続中であり、本年度末までには公開の予定である。また、国際日本学に深く関係する「在ベルリン・吐魯番文書関係データベース」も簡易WEB公開機能を用いて公開した。これは、ベルリンのドイツ国立図書館その他に所蔵されている、トルファン出土の漢文世俗

文書を整理して、全文テキスト・画像付きで公開するものである。

以上が各チームの報告内容の概要であるが、それをうけ本プロジェクトの研究成果全体を、次のように取り纏めることができる。

(1)日本文化研究を内外に開かれたものにすることによって、「国際日本学」の構築に一步を踏み出すことができたばかりか、人文科学の領域における、横断的・学際的、かつ国際的な規模での共同研究の一つのモデルを提示することができた。

(2)「日本の中の異文化」(とりわけ、琉球・沖縄の文化、蝦夷・アイヌの文化)に目を向け、日本文化を単一で均一のものと見なすことなく、その国際性・重層性・多様性に着目することによって、日本文化研究の新局面を切り開きつつある。

蝦夷・アイヌ研究については、日本文化の基層をアイヌ文化に探るという立場から、アイヌ文化の成立と変容の動的分析に着手し、多くの成果を挙げることができた。

また、日本文化の特質(古層)を、アジア諸国との関係において、文化接触・文化変容という観点から解明する研究は、屋敷囲いとしての石垣に着目して風土と文化の関係を探究する研究とも交差しながら、日本文化研究の新しい展開を予想させる。

「富士山をめぐる日本人の心性」についての研究も、その裾野の広がりと奥行きの深さとのゆえに、日本の古典文化と民衆文化を貫く日本文化についての深層を開示しつつある。

(3)能楽研究所、沖縄文化研究所とも協力して、日本研究という観点から国際的に価値あるコンテンツを電子資料化(デジタル化)し、それを世界に向けて公開するという、いわゆる「電子図書館システム」の構築は、本プロジェクトの目覚しい成果である。

これは、国内外の研究機関・研究者とリアルタイムに研究情報を共有しつつ、「日本学の総合的研究」を推進、展開するための、基本的ではあるが、枢要な要件である。

(国際日本学研究所所長 星野 勉)



活動の足取り

1. 公開研究会 『琉球処分と最後の琉球王』ローザ・カーロリ氏 2006.6.21 80年館 7階大会議室(角)
2. ワークショップ パリ・シンポジウム第1回成果検討会『パリ・シンポジウムを振り返る』桑山 敬己氏、『国際日本学』構築に向けての課題—パリ・シンポジウムをうけて—星野 勉氏 2006.7.31 14:00~18:00 80年館 7階大会議室(角)
3. ワークショップ パリ・シンポジウム特別成果検討会『翻訳と文化アイデンティティ』島田 信吾氏 2006.9.26 18:30~20:30 ポアソナード・タワー25階 C会議室
4. ワークショップ 『ドイツの研究者から見た丸山眞男の政治思想』ウォルフガング・ザイフェルト氏 2006.9.30 13:30~15:30 ポアソナード・タワー19階 D会議室
5. ワークショップ パリ・シンポジウム第2回成果検討会『日本学への2、3の提言—パリ・シンポジウムに参加して』田中 優子氏、『ヨーロッパにおける日本研究と人文科学の未来』ジョセフ・キブルツ氏 2006.9.30 17:30~21:00 ポアソナード・タワー19階 D会議室
6. ワークショップ パリ・シンポジウム第3回成果検討会『韓国における親日・反日から日本学を考える』崔 吉城氏、『日本学の可能性—中国の視点から』王 敏氏 2006.10.21 17:30~21:00 ポアソナード・タワー25階 C会議室
7. 国際日本学シンポジウム 「国際日本学—ことばとことばを越えるもの」 2006.11.18~19 ポアソナード・タワー26階 スカイホールほか
8. 第1回学術研究員定例研究会 2006.11.25 14:00~17:00 80年館 7階大会議室(角)
9. 国際研究集会 「能の翻訳を考える—文化の翻訳はいかにして可能か—」 2006.12.15~17 ポアソナード・タワー26階 スカイホールほか
10. 学術フロンティア成果報告会 「日本学の総合的研究」 2006.12.25 13:00~18:00 ポアソナード・タワー25階 B会議室

新刊案内

「ドイツ語圏における日本研究の現状」



この叢書には、以下の内容を収録している。

- ・序文 ヨーゼフ・クライナー
- ・ドイツ・ドイツ語圏における日本研究の歴史 ヨーゼフ・クライナー
- ・ドイツの大学における日本語教育の現状と問題点 モニカ・ウンケル
- ・ドイツ人の見た日本史 クリストイアン・オーバーレンダー
- ・ドイツにおける日本の政治の研究 アクセル・クライン
- ・ドイツにおける日本経済の研究 フランツ・ヴァルデンベルガー
- ・ドイツ語圏における日本法への学問的取り組み ハインリッヒ・メンクハウス
- ・ドイツに於ける日本の宗教と思想史の研究 クリストイアン・シュタイネック
- ・日本文化研究と新メディア：文学と史料の電子化をめぐる諸問題 ロベルト・ホレス
- ・日本の民族学的研究 ヨーゼフ・クライナー

・執筆者履歴

付録1：「日本におけるドイツ年」を振り返る 在駐ドイツ連邦共和国大使館

付録2：ドイツ語圏における日本研究機関 Roswitha Stürmer, Stefan Roesner(共編)

法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究センター

〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
法政大学市ヶ谷キャンパス 第一校舎4階
TEL. 03-3264-9682 FAX. 03-3264-9884
E-mail:nihon@hosei.ac.jp
URL:<http://aterui.i.hosei.ac.jp/cgi-bin/nihongaku-top.htm>

